

論文の内容の要旨

論文題目： Narratological Function of the Disciples in the Fourth Gospel
—Formation of the Implied Reader through the Narrative Perspective of the Disciples—
(ヨハネ福音書における「弟子たち」の物語論的機能 —弟子たちのナラティブ視点を通じての内的読者の形成—)

氏名： 三浦 望

本論文は、ヨハネ福音書における弟子たちの物語論的機能と、弟子たちのナラティブ視点を通して内的読者がどのように内的作者の意図に従った読み手として形成されるかを分析するものである。また特に、イエスの弟子たちの中でも、通称「愛弟子」（「彼の弟子たちの一人でイエスの愛しておられた者」*εἷς ἐκ τῶν μαθητῶν αὐτοῦ...*, ὃν ἠγάπα ὁ Ἰησοῦς, Jn 13:23)が福音書後半の13章以降に登場する理由、そしてこの愛弟子の視点が内的読者にもたらす効果についても考察する。

第一部 (Part I) においては、ヨハネ福音書研究動向をまとめ、歴史批評と文芸批評が拮抗する現状を鑑みつつ (Excursus I)、ヨハネ研究における「弟子論」の先行研究を網羅した。ヨハネ福音書では、議論の余地なくキリスト論がその中心的なテーマであるが、その一方で、テキスト構成が浮き彫りにするキャラクターとしての「弟子」(μαθητής)たちの重要性を確認した。弟子たちは、物語の最初(弟子たちの召命, Jn 1:19-51)から最後(復活顕現物語, Jn 20:1-21:23)まで常にイエスと行動を共にしつつ登場し、そのなかでも告別説教でのイエスの長い講話は選ばれた弟子たちだけ(「十二人」οἱ δώδεκα)に向けられている。弟子の重要性は、ヨハネ福音書の「パラテキスト」(paratext)——序文 The Prologue (Jn 1:1-18), 二つの終結部 The Epilogues (Jn 20:30-31; 21:24-25)——におけるナレーターの話りからも確認できる。パラテキストは、福音書の物語(ストーリー)に対して一段高い視点から物語全体を見渡し枠づけ、物語全体を理解した視点(= the post-Easter perspective)から解釈的な構成諸要素を提示し、物語を内的作者の意図に沿う形で解釈する手掛かりを与える。福音書全体をキリスト論的に総括する序文においては、「わたしたち」という証言者/ナレーターの視点が組み込まれ、二つの終結部では、この証言者(わたしたち/わたし)が「弟子(たち)」と同定されている。イエスの言動の証言者としての「わたしたち」とは、物語でイエスと行動を共にした「弟子たち」に他ならない。福音書後半部では弟子の視点が「愛弟子」に収斂し、彼がナレーターと同じ役割を果たしながら (Jn 21:24)、受難物語を導く視点を提示し、終結部パラテキストでの弟子の視点も、ナレーターが物語のキャラクターとしての「弟子」と相関関係にあることを示している。ヨハネ福音書の目的は、「イエスがメシアであることを信じ、それによって永遠の生命を得ること」(Jn 20:31)とされており、弟子たちのナラティブ視点および証言によって内的作者が内的読者を形成することが福音書の基本的な構成となっているのである。

福音書前半部 (The First Half, Jn 1:19-10:42) において、ナラティブに登場する様々なキャラクターが、イエスの弟子 (信従者) の「モデル」(type cast) を内的読者に提示している。第二部 (Part II) では、こうしたエピソードを通じて内的読者が内的作者の意図に従った弟子像を育む過程を物語論的に追った。福音書のナラティブは、「弟子たちの召命物語」で始まり (Jn 1:29-51)、ここから内的読者は弟子たちというキャラクターを通じてイエスと共にイエスの証言者となる「信仰の旅」(the faith journey) に招かれる。しかし、既に内的読者は序文を含めた内容から、ナレーターを通じてより詳しい情報を得ており、キャラクターとしての弟子たちよりもイエス理解において優位な位置に立っている。これにより、内的読者は弟子たちに対して(「ユダヤ人」に対しても)一定の距離を保ちつつ、二つの陣営(信仰/不信仰)の間で決断し、イエスに従うという構造が示される。イエスと出会う様々なキャラクターは、イエスに対する信仰表現の「モデル」を体現し、内的読者はこうしたいくつかの「モデル」を通じて、より理想的な「イエスの弟子」として成長するように仕込まれている。福音書前半部では「新しい神殿」としてのイエスのモチーフが配置され (Excursus II)、この神殿に集う者としての弟子たちが描かれる。内的作者は理想的な弟子像(「見ないで信じる信仰」)のパターンを繰り返し提示する一方で、各エピソードの最初と最後(もしくは最初のみ)に弟子たちを登場させている。それによりエピソード全体が「弟子論」的な視点で理解されるよう「《枠》効果」(the “framing” effect) が施されている。また、前半部において、弟子たちに加え、各エピソードに登場する人々やイエス自身の言葉も内的読者の弟子像形成に大きく貢献することも確認した。福音書の転換部となる the Bridge Section (Jn 11:1-12:50) では、イエスにより親しく、イエスによって生命を受ける「愛する者(友)」としてのラザロが家族関係のうちに提示され、一步深めた弟子像へと内的読者を導く。同時に、ナラティブはイエスの受難に向けて「時」の到来を示し、内的読者を福音書後半部 (The Latter Half, Jn 13:1-20:29) へと導入する。

第三部 (Part III) では、福音書後半部において、内的読者が弟子像を形成していく過程を考察した。「神の家族」(Familia Dei) への迎え入れを象る洗足に始まる告別説教 (Jn 13:1-17:26) では、イエスの長い独白講話が続き、内的作者によってヨハネ的な弟子像の在りようがイエスの言葉を通じて語られる。福音書ナラティブにおいて、告別説教は物語のプロットや時間があたかも停止したような独自の空間 (Zäsur, 中間休止) を形成し、イエスは「高举のキリスト」(the Exalted Christ) として弟子たちに語る。Jn 13:1 や 15:1-17 に表現されるように、告別説教のテーマは愛/愛における関わり (Love Relationships) である。キリストの死によって拓かれる父と子と弟子たち(神の子たち)の愛の交わりが相互内在として描き出されている。

Jn 13:23 で初めて登場する「愛弟子」は、前半部で内的読者の中で形成された理想的な弟子像を、ナラティブ後半部で引き受ける。前半部において、弟子たちの回顧的視点が内的読者に対して、読み・解釈の基準を示したように、後半部においてはこの愛弟子の視点が——最終的に、彼の視点がナレーターと同定されるのであるが——内的読者を導く。受難物語 (Jn 18:1-19:42) においてもまた、この愛弟子/ナレーターの視点が内的読者を十字架上のイエスまで導く。死に際したイエスがこの愛弟子と母に対して相互に託した親子関係のなかに、「神の家族」の完成を見る (Cf. Excursus IV)。内的読者は愛弟子と共に、この新しい神の家族の「子」として規定される。

最後に復活顕現物語 (Jn 20:1-29) において、弟子たち(そして内的読者)の「信仰の旅」が閉じられる。この部分は冒頭の召命物語と呼応し、ナラティブ全体が弟子のエピソードで囲い込まれる。同時に、この旅を通して成長・変化した「復活後」の弟子たちの在りようが示される。ナラティブを通じた信仰の旅は、復活後のイエスの言葉 (Jn 20:17) や弟子の信仰告白 (20:28) に表明される通り、内的読者が「神の家族」に子として属すること(「親子化」、affiliation) と神の「固有化」(personalization) に至ることで全うされる。第二の復活顕現物語 (Jn 21:1-23) では、シモン・ペトロと愛弟子の二人に焦点が当てられ、ヨハネの弟子像における補完的な二つの役割(使徒的殉教者としてのペトロと証言者としての愛弟子)が強調されつつ、内的読者の視点を物語レベルから内的作者/ナレーターの視点へと引き上げ、内的読者をナラティブの出口へと導く。

以上の考察から以下の事柄を結論として導き出した。

キャラクターとしての弟子たちの描写とその機能：弟子たちは基本的にイエスに親しみ、寄り添う者として登場するが、往々にして理解不足や誤解を示す。しかし、こうした否定的な弟子の描写は、内的読者には「好対照」(foil) として機能し、内的読者がより理想的な弟子像を抱くための刺激となる。弟子の中でも裏切り者として提示されるイスカリオテのユダは、理想的な弟子像のアンチテーゼとして働く。また、理想的な弟子像が繰り返し提示される一方で、その他のキャラクターたちは曖昧さを孕みながらも、ヨハネの弟子像の幅広い枠内でひとつのモデルを提示する。内的作者は様々なモデルを提示しつつ、個々の召命の多様性とヨハネの弟子像の豊かさを強調している。

弟子たちの復活後視点とその機能：登場人物の中でも復活前 (the pre-Easter) と復活後 (the post-Easter) の視点を示すのは弟子たちだけである。この時折出現する弟子たちの復活後の視点もまた内的読者が内的作者のイデオロギー視点を把握するために貢献する。弟子たちの視点は、復活前と復活後の視点の間で「揺れる」(fluctuate) ことが考察されたが、弟子たちの復活後視点に示されているイデオロギー視点が内的読者を鼓舞し、この意味で内的読者の形成に寄与する。

ナラティブ視点とナラティブ構成の相関関係および物語論的な機能: ヨハネ福音書ナラティブが内的読者をイエスの弟子として形成するべく構成されていることが明らかになった。内的読者は序文のパラテキストから証言モチーフ（「わたしたち」証言句）を介してナラティブに導入され、弟子たちやその他のキャラクターによって弟子像を形成する。告別説教では、復活後視点のイエスの言葉が物語レベルの内に埋め込まれており、内的読者の視点も否応なしにパラテキスト・レベルに引き上げられるが、内的作者の意図としてはイエスの言葉を物語論的に再構築された過去に繋ぎ止めようとする努力が見られる。後半部では愛弟子が登場し、内的読者をイエスの受難および「神の家族」の完成へと方向づけ、最終的に終結部で再び内的読者が「わたしたち」証言句に向き合うような仕組みとなっている。終結部パラテキストにて二人称複数（「あなたがた」）で呼び掛けられる内的読者は、こうしてナラティブの冒頭の序文パラテキストの「わたしたち」証言に統合される。繰り返し物語を読むことを通して、福音書ナラティブは、内的読者がより内的作者の意図に近いイデオロギー視点を得られるように配備されているのである。